

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese

イタリア民話の世界②

民話を訪ねる旅 1

剣持 弘子

前回(9月号)は、イタリアの民話の世界にお誘いするにあたって、民話というもののあらましをお話しましたが、今回からしばらくは、私がイタリアで出会った語りの現場の報告をしたいと思います。そして、毎回イタリアの民話の一つずつ紹介していきます。

●モンターレへ

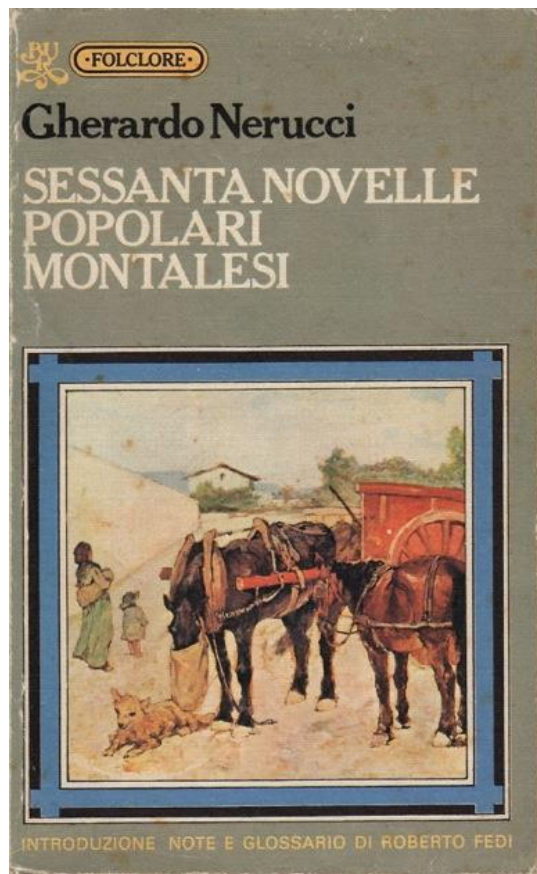
前回も書いたように、私は 1990 年春から一年間フィレンツェに滞在しました。夫の長期出張に便乗してのことでしたが、私には私なりの目的がありました。

できれば民話の語りの現場に出会いたいという強い思いがあったのです。当時、ヨーロッパではもう、語りは聞かれないといわれていましたが、きっとどこかにまだあると、あまり根拠のない望みを捨てきれないでいたのです。

さて、民話に出会うために私が用意したのは、19世紀の末に出版された『モンターレの60話』という一冊の民話集でした。数ある中からこの本を選んだのは、もちろん、この本には魅力的なお話がたくさん詰まっていたからですが、それだけではありません。モンターレという村がフィレンツェに近くて、しかも、あまり大きくなく、手がかりをみつけやすいと思ったからでした。この本がたった一つの手がかりでした。

モンターレはフィレンツェから車で西へ1時間ほどの小さな村です。イタリアを南北に分ける、なだらかな山脈の麓にあります。この民話集には、その村だけで集めたという民話が60話収められて

います。初版は 1880 年ですから、私が行ったときにはすでに 100 年余り経っていました。でも、そこに行けば、まだ何かしら名残があるのではないかという漠然とした期待はありました。



【『モンターレの60話』表紙】

ところで、フィレンツェには、古くからの友人が一人いました。音楽の勉強にイタリアに渡ってか

ら、当時はもう30年近く経っていました。イタリア人の夫君に先立たれた彼女は、日本から声楽の勉強にくる若い人や、近所のイタリア人たちに、歌唱の手ほどきをしながら、一人で暮らしていました。

イタリアで、とくに田舎へ行くのは、車無しでは難しいことです。鉄道もバス路線もあまり便利ではありません。そこで、私は彼女にあちこち車で連れていってもらって代わりに、その日の昼食と、ときには夕食もご馳走するという取り決めをしました。昼食は出先で彼女のお勧めのレストランへ、そして、夕食はできるだけ我が家で手造りの日本食をふるまうことにしました。

●ロランド・ヴィヴァレツィ氏との出会い

夏が近くなった頃、いよいよモンターレに行くことになりました。だれともコンタクトをとっていない、ぶっつけ本番の、語り手探しです。

村に着くなり、1軒のバールが目に入りました。



【バール・マーラ】

私たちは、まずコーヒーでもと、その店に入りました。まだ昼前だったせいかお客は一人もいませんでした。カウンターには50歳くらいの女主人が一人店番をしていました。私は、当たって砕けろとばかり、あの民話集を見せて、「この本をご存知ですか？」と聞いてみたのです。すると、なんと、「うちの亭主がそれに夢中ですよ」というではありませんか。いきなりの幸運です。さっそく、「ぜひ、ご主人に会わせわせてください」とお願いしたところ、女主人はちょっと奥にひっこんでから、まもなく戻ってきました。

「ちょっと、待っていてください。じきにくるでしょう」

あまりにもことが簡単に運びそうなことに、かえって不安になったりしました。思いがけない異国からの客にあちらも戸惑いがあったのでしょうか、ちょっと待たされました。

現れたのは、あまり大柄でない、きさくなおじさんでした。

早速、来意を告げ、本を見せると、すぐにこちらの意図は通じたようでした。そして、「残念ながら、この本にあるようなお話を語れた最後のおばあさんは、つい先頃亡くなってしまったけど、今でも、とくに男たちがバールに集まると、すぐに『話』がはじまるよ」といわれました。長い昔話ではないけれど、ただのおしゃべりではない、「小話」とでもいえるでしょうか。それは、たいがい笑い話だということでした。

このあと、私たちは、その笑い話をきかせてもらうことになりました。

そして、テープに録音したものをアパートにもちかえり、たった1話だけでしたが、なんとか日本語に起こすことができました。何度も聴き返し、やっと仕上げ、友人のお墨付きをもらうことができました。彼女の夫君はフィレンツェ郊外の人だったので、彼女には聞きなれた訛りだったようです。

それが、次にご紹介する話です。

ところで、どこの国でも、笑い話といえば、時の権力者、しかも身近な権力者を笑う話が多いものですが、イタリアではその権力者は、地方の聖職者であることが目立ちます。この話もそうでした。



【語るヴィヴァレツィ氏】

【今月のお話コーナー：笑い話】

ローストチキンとフライドポテト

ここらじゃ、坊さんたちはみんな農場をもっていた。だれでもね。つまり、坊さんはみんな地主だったってことだ。ここでは、教会、つまり僧院のかけりを7人の小作人がみてたんだ。

毎年小作人は地主のところへ勘定をしに行く。そして、こういうことは昔からの習慣なのだが、勘定がすむと、地主はその小作人に食事をふるまうことになっていた。

あるとき、一人の小作人が、いつものように勘定をしに行くことになった。するとそのお百姓の総領息子が、こんなことを言った。

「父さん、おれもいっしょに行ってもいいかい？ おれだって、そろそろ心得とかなくちやいけなと思うよ。父さんがいなくなったとき、おれもどうすればいいか知っておくべきだろ？」

「そうさな、よかろう」

というわけで、二人は僧院長のところへ行った。

僧院長は息子がついてきたのを見ると、ちょっと困ったなと思ったが、顔には出さず、「ああ、よく来た、よく来た」と言って迎えた。

すでに、鶏を1羽絞めてあったのだが、それはごくごく小さな若鶏だった。息子がついてくるとは思っていなかったからね。

手伝いの女も困って、僧院長に相談した。「これだけの鶏では足りそうもありません。どうしましょう」

「そうだな。うん。ともかく付け合わせのフライド・ポテトをたっぷりつけてくれ。あとはわしがなんとかしよう」

さて、手伝いの女が若鶏のローストとフライド・ポテトの大皿をテーブルに運んできた。そこで、僧院長が言った。

「おお！ すごい！ よくやった！ おまえはえらい女だ！ なんとすばらしいフライド・ポテトではないか！ さあ、どうだ！ 金色に光っている。き

れいなもんだ！ おまえたち百姓はなんと幸せ者だ。こんな素晴らしい芋が畑にあるのだからな。さあ、自分でとってどんどん食べてくれ」

それでお百姓の息子はどうしたかって？

自分の前にご馳走の大皿が回ってくると、さっそうくフライド・ポテトをとろうとしたんだ。僧院長があれだけほめあげたフライド・ポテトだからね。

すると、父親が息子の手をとめて言った。「やめろ！ 礼儀知らずめ！ 鶏をとれ！ 今の話を聞いていなかったのか。ポテトは僧院長さまの好物だっということがわからなかったのか！」

★次回は 民話を訪ねる旅2 の予定です。

(イタリア民話研究家)

～会館だより～

イタリア語 無料体験レッスン

2015年1月より開講の冬期イタリア語講座に向けて、体験レッスンを開催します。

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館
1/6(火) 11:00～12:30
1/10(土) 11:00～12:30

● 四条烏丸：ウイングス京都
1/9(金) 19:00～20:30

● 梅田：大阪駅前第4ビル
1/6(火) 11:00～12:30
1/12(月) 19:00～20:30

スペイン語 無料体験レッスン

入門者向け。事前予約制。

● 京都本校：日本イタリア会館
1/10(土) 11:00～12:30

イタリア発月刊日本語新聞

COMEVA
Pubblicazione mensile distribuita in Italia e in Giappone

イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

トリエステ留学体験記

奥村 道子

2014年6月23日から2週間、バカンスを兼ねてトリエステのイタリア語学校に行ってきました。学校と滞在先の手配をしてくださったのはイタリア会館の片山さんです。イタリア东北部、フリウリ・ヴェネチア・ジュリア州の州都であるトリエステはアドリア海に面した港町で、スロベニアと国境を接しています。

今回、滞在先にトリエステを選んだのは、数年前ヴェネチアから日帰り旅行をした際の印象がとても良かったからです。港町にありがちな猥雑な雰囲気はまったくなく、明るく清潔な感じを受けました。その時はわずか数時間の滞在だったので、いつか是非もう一度訪れて街をゆっくりと歩いてみたい、そしてここを起点にグラード、アクイレイア、ウーディネ等の街々や隣国スロベニアにも足を延ばしてみたいと思ったからです。

海沿いのイタリア統一広場を中心に丘の上まで広がる人口約25万のトリエステは外面だけでは計り知れない複雑な歴史を持つ街です。

古代ローマ劇場の遺跡も残るこの街は、14世紀から500年の長きにわたって、旧オーストリア・ハンガリー帝国の海への出口として栄えました。建築の面ではオーストリアの影響を受けた歴史的なカフェが立ち並ぶ街としても知られていますが、ウィーンやブダペストで愛飲されたコーヒーの豆も、ここトリエステからへ運ばれていたということです。日本でも見かけるイリー・カフェの本店も実はトリエステにあります。ハンガリー生まれのフランチェスコ・イリーが創設しました。

トリエステ中央駅の向かい側の小さな広場には、実質上オーストリア・ハンガリー帝国の最後の皇帝であったフランツ・ヨーゼフ1世の妃、エリザベットの像があり、また、町外れの海沿いには皇帝の弟マクシミリアンのために建てられた白亜のミラマーレ城が建っていて、中央駅からバスに乗れば30分ほどで着くことができます。



【エリザベットの像と筆者】

第一次世界大戦後の1918年、オーストリア・ハンガリー帝国は瓦解し、トリエステはイタリア王国領となります。しかし、第二次世界大戦後にはイタリアと旧ユーゴスラビアとの間で帰属をめぐる紛争が発生、一時期は国連の管理下に置かれて、トリエステ自由地域となっていました。1954年以降は、北部と港がイタリア領、南部がユーゴスラビア(現スロベニア共和国)領となっています。

私のトリエステでの滞在先の家主クラウディアさんは、この時に現在スロベニア領となっている地域からトリエステの街中に移り住んだということです。

通った学校はイステイトウト・ヴェネチアのトリエステ校でした。ヴェネチアの語学学校が夏期のみ(4月末~10月末)サンタ・マリア・マッジョーレ修道院の中で開講しています。修道院はイタリア統一広場から徒歩約5分の丘の上であり、教室からはアドリア海が望めます。滞在先からは坂道を3分ほど上ったところでした。



【サンタ・マリア・マッジョーレ修道院】

授業開始日の前日6月22日(日)の明るい時間帯に余裕をもってトリエステに到着できるようにと選んだ飛行機は、トルコ航空でした。トルコ航空は関空からイスタンブールまで毎日便があり、イタリアの主要都市との乗り継ぎも容易です。6月21日(土)の夜、関西空港を発ちイスタンブール経由で22日午前9時45分にヴェネチアのマルコポーロ空港に到着。そこから空港バスでヴェネチア・サンタルチア駅へ移動しました。

ヴェネチアからトリエステまでは Regionale Veloce という列車で約2時間の旅です。ヴェネチアの駅で後悔したのは、列車の切符を事前にインターネットで購入しておかなかったことでした。予約の要らない列車なので駅の切符売り場で購入すればいいと思っていたのですが、その日はあいにく窓口が長蛇の列で、いつになったら買えるのか見当もつきません。券売機で購入しようとしたものの何故か上手くいきません。しばらく観察していると券売機には現金対応とクレジットカード対応の2種類があることが分かりました。私はクレジットカードしか受け付けられない券売機に現金を使おうとしたので上手く行かなかったのです。日本の券売機のように現金とカードの両方が使用できるものはありませんでした。やっとお金の絵が描いてある券売機を選んで無事現金での購入に成功。少し手間取りましたが窓口に並ぶより遥かに早く切符を手に入れることができました。

トリエステ中央駅到着後は、市バスで滞在先へ向かいます。場所は事前にインターネットで調べて、ストリートビューで建物や通りの様子も見ておきました。丘に向かう上り坂の途中にある古いパラッツォのような重厚な建物です。イタリア統一広場近くのバス停から歩いて10分程度で行けるようでした。

ほぼ予定通り、午後3時頃建物の前に到着。門扉の横にこの建物の住民の名前が書かれた表札が並んでおり、その中から家主のクラウディアさん宅のを見つけ呼び鈴を押します。応答はすぐにはありましたが、「Terzo piano」だと言います。恐れていたようにエレベーターはなく、日本でいうところの4階までスーツケースを抱えて大きな石の階段を上るのは一苦勞でした。



【イタリア統一広場】

クラウディアさんは独り暮らしで、4階と2階に一つずつアパートを所有しているようでした。4階のアパートには、彼女の寝室とリビング、キッチン、バス、トイレがあり、その他に客用のシングル・ルーム二つとダブル・ルームが一つありました。今回の滞在の宿泊形態はシングルのホームステイで、キッチンの利用可というものです。私は彼女の寝室の隣にあるシングル・ルームに案内されました。もう一方のシングルには、その夜遅くクロアチアからの女学生が母親の運転する車で到着するとのことでした。ダブル・ルームは私の滞在中は空いていました。キッチン、バス、トイレは共用ですが、住人は3人だけなので鉢合わせをすることはありませんでした。到着後すぐにクラウディアさんがWiFiのパスワードを教えてくれたので、自分の部屋でインターネットやLINEを無料で利用することができ、非常に便利でした。

この建物の地上階の一角でバーを経営しているクラウディアさんはほとんど家にいませんでした。私は、一度だけ説明してもらったガスコンロの点火方法を忘れてしまい、もう一度教えてもらおうとしたのですが、なかなか顔を合わせる機会がなく、はじめの四日間はお湯を沸かすことができませんでした。

もっと困ったのは、渡された四つの鍵の使い勝手です。建物の一番外にある扉(il portone)を開けるための鍵が一つ、4階にたどり着きクラウディアさんの家の玄関(l'ingresso)を開ける鍵が上下二つ、私の部屋の鍵が一つ、というもので四つともそれぞれ独特の開錠の仕方があり、コツを飲

み込むのにかなりの日数を要しました。形もよく似ているため、どれがどこの鍵なのか見分けがつきにくく、ノートに絵に描いてそれぞれ開け方を書き記し、暫くはそれを見ながら扉を開けていました。

トリエステに到着した日の翌 23 日(月)の朝 8 時 45 分に学校へ行くと、簡単なクラス分けのテストと面接があり、その結果上級クラスであるレベル 3 に振り分けられてしまいました。このクラスの授業内容は接続法や条件法、関係代名詞等、イタリア会館で勉強しているレベルよりも難しかったので、毎晩遅くまで予習、復習が必要でした。

授業は 9 時から途中 20 分ほどの休憩を挟んで午後 1 時までで、前半は文法、後半は会話です。最初の 1 週間は生徒が 5 人で、内訳はアメリカ人 2、フランス人 1、ブラジル人 1 そして日本人(私)1。次の週になると私以外の 4 人はいなくなり、新たにやってきた 6 人と一緒にになりました。6 人の内訳はオーストリア人 2、ハンガリー人 1、スコットランド人 1、イングランド人 1、オーストラリア人 1 でした。

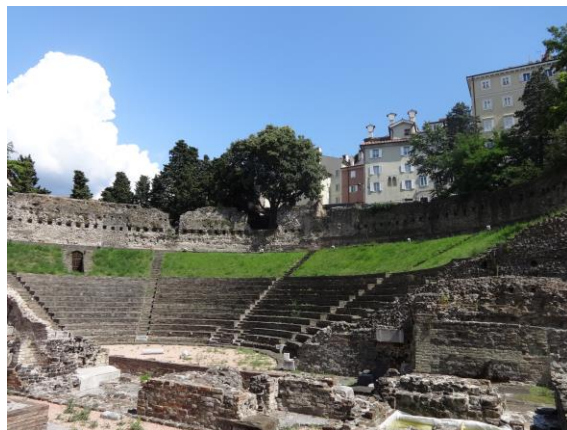
午後からの学校主催のプログラムにはほぼ毎日参加しました。このプログラムのお蔭でセルビア正教会のサン・スピリディオーネ聖堂やギリシャ正教会のサン・ニコラ聖堂といった教会や、リジエーラ・ディ・サン・サツバのような史跡、それにカルソ地方等を初めて知ることができました。リジエーラ・ディ・サン・サツバというのはイタリアに唯一存在したナチスの絶滅収容所の跡で、現在は博物館になっています。一緒に見学したウィーンからきているチェコ系オーストリア人のエリカは、彼女の親族の何人かが第二次世界大戦中に他の強制収容所で命を落としたのだという話をしてくれました。カルソ地方はスロベニアとの国境地帯に広がる石灰岩の台地で、鍾乳洞で有名な地域です。

こうした午後のプログラムは、他のクラスの生徒とも知り合うことができる良い機会でした。生徒の年齢層は広く、若い人だけでなく私のように孫がいる年齢の人もたくさんいたので楽しい滞在となりました。昔は同じ国だったという関係からなのか、あるいは地理的に近いということもあるのか、

旧オーストリア・ハンガリー帝国領の国から来ている人が目立ちました。アジア人は、イタリアの男性と結婚予定だというインドネシア人の女性と私の二人だけでした。

滞在中は街を歩いていても日本人らしき人を見かけることはなく、日本の家族と何度か電話で話した以外は一度も日本語を話すことはありませんでした。授業のない土曜、日曜にはスロベニアのブレッド湖と首都リュブリャナを訪ねる 1 泊旅行もしました。行きはトリエステの北西 45 キロにあるスロベニアとの国境の街ゴリツィア経由、帰りはリュブリャナからトリエステへのバスを利用しました。ウーディネへは午後の半日で、グラードとアクイレイアへは最後の金曜日の授業を休んで行ってきました。

トリエステは治安も良く、繁華街はイタリア統一広場を中心に徒歩圏内に広がっています。一人で気軽に入っていけるレストランやカフェも多く、街歩きを楽しめます。落ち着いた環境でじっくりイタリア語を勉強したい方や、陸路で国境を超えることに興味のある方には、迷うことなくお勧めできる滞在先だと思います。



【古代ローマ劇場の遺跡】

(当館受講生)

編集・発行 / (公財) 日本イタリア会館
〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町 4
TEL: (075) 761-4356/FAX: (075) 761-4357
E-mail: centro@italiakaikan.jp
URL: <http://italiakaikan.jp/>